



日動労千葉

国鉄千葉動力車労働組合

〒260 千葉市中央区要町2番8号 (動力車会館)

電話 (鉄電) 千葉 2935・2939 番

97.3.11 43 (22) 4561

No.

日貨労革マルの奮闘 への全面屈服を弾き返す

3月ダイヤ改で画策されている、佐倉機関区廃止を焦点とした貨物基地の統廃合攻撃粉砕の闘いを起点として、「新フレイト二一」

「計画自体、これだけの大合理化を強行したとしても、JR貨物が企業としてなりたつ展望は何ひとつ語られていないのだ。だからこそ、「貨物基本問題懇談会」では、日通などの物流会社や荷主会社への株の放出や、線路使用料・ダイヤ設定に関し、法的規制や第三者機関の設置が検討されているが、これは、分割・民営化政策が完全に失敗したことの自認にほかならない。

かにちゃんとした民間会社になり得る土壌が確立される、そういう新フレイト二一でなければならぬ。組合がどこまで甘受できるか。われわれも血を流し、場合によれば肉も小骨も切らなくてはいけない」

これが、労組の委員長の「挨拶」だ。そして、新フレイト二一計画・貨物基本問題懇談会を「将に正念場」とし、「労使一致して闘う」政府・資本、貨物当局の合理化政策に屈服・協力するというレベルではなく、その完遂のために「闘う」というのだ。

JR総連・革マルは単なる労使協調派の労働運動ではない、まさに、「ファシスト労働運動」そのものだ。

分割・民営化攻撃のなかで、国鉄労働者は、その半数にあたる二〇万人が職場を追われた。JR貨物は一万二千人で発足した。それを、さらに半分の「六千人体制」にするというのだ。この数字だけを見ても「新フレイト二一」攻撃の重大性は明らかだ。貨物の労働者に首切りと労働強化・低賃金を強制し、安全を切り捨て、その結果、構造的な矛盾がさらに雪だるまのように拡大する、これが「新フレイト二一」の性格だ。

こうした事実には一切フタを置いて、政府・資本の忠実な奴隷頭として立ち回っているのが、JR総連、日貨労・革マルだ。日貨労委員長長の革マル・城石は、JR貨物会社とJR貨物労組の共催で開催された九七年新春フォーラムにおいて次のように挨拶している。

「基本問題懇談会のワーキンググループで新フレイト二一の内容について、取り敢えず議論が終わった。JR貨物の自助努力の問題で一番大事なことはなにか。この貨物会社が何年後

ながら、二月三日に開催されたJR総連の第十九回中央委員会で日貨労書記長の革マル・緒方はこう発言している。「貨物は今年も赤字で四年連続、しかも三桁と思われる。改革から十年、本来はこれからの十年を展望するときであるが、JR貨物はそんな状況になつていない」

「新フレイト二一」は、この「新フレイト二一」懇談会の取り組みを強化し、それに反対する、「貨物国労」場から一掃しよう」と、労においても、「国労解決」をうちだしているのだ。

肉も小骨も切る決意で

「肉も小骨も切る決意で」と、組合員が叫ぶ。これは、組合員が、肉も小骨も切る決意で、組合員が叫ぶ。これは、組合員が、肉も小骨も切る決意で、組合員が叫ぶ。

犠牲は、組合員に...

犠牲は、組合員に... 犠牲は、組合員に... 犠牲は、組合員に...

第204号 1997年1月25日

JR貨物労組

日本貨物鉄道労働組合

改革元年、厳しさに労使が共に立ち向かう

新フレイト21計画・基本問題懇談会
将に正念場 新春フォーラム開催

労使一致して闘う年
城石委員長挨拶(要旨)

将来を決すのは貨物
柳橋JR貨物社長

1997年新春フォーラム